

「ごんぎつね」の文学の授業（六年）（二）

—「感動」の形成過程に関する考察—

本稿は、新美南吉作「ごん狐」を小学校六年生を対象に実施した授業に基づき、児童にとって「感動」が学習過程の中でどのようにして形成されるのか、その形成過程を認識の深化・共感の形成・意欲の向上の視点から考察しようとするものである。本研究に先立ち、「授業の概要」に関しては別稿「『ごんぎつね』の文学の授業（六年）（一）—授業の概要—」（以下、別稿（一）と略記）において詳述している。

一 認識の深化・共感形成に関する全体的考察

(一) ごんぎつねの人物像（「ひとりぼっち」の境遇・「いたらずら」の行為・「ややしん」）

1 第一次感想文と第二次感想文における認識の深化・共感形成

感想内容について比較考察を行う前に、自由に記述した第一次と第二次の感想文中における人物像にかかわる感想量（数）の比較を一瞥しておきたい。（下表）

本表において明白なように、ごんぎつねの人物像の各側面において感想数が増加している（約二・七倍増加）。このことは言うまでもなく、読みの深化を量的に物語るものである。（読みが細部表現まで行きわたる、その反応としての感想量の増大）

△表①◇ 感想量（数）比較

		ごんぎつねの人物像					
		頭がいい	「やよしん」	「いたらずら」の行為	「ひとりぼっち」の境遇	第一次感想文 感想内容 感想数	第二次感想文 感想内容 感想数
		1	9	5	2		
年齢・ の 名前・ ごん							
	4	3	20	8	11		

北

吉 郎
教育学部国語教室

(注)別稿「『ごんぎつね』の文学の授業（六年）（一）—授業の概要—」に「備考」の「感想内容一覧」より、感想数を抜粋。

(1) 「ひとりぼっち」の境遇に対する認識深化・共感形成
 第一次と第二次感想文において「ひとりぼっち」の境遇について記述しているそれぞれの感想内容を整理し比較して示すと次表のようになる。

△表②▽ 境遇「ひとりぼっち」に関する感想内容の変容 (傍線引用者)

「ひとりぼっち」の境遇	
素朴な疑問	
第一次感想文	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中山というところに、どうしてひとりぼっちで住んでいるのだろう。(西浦)
同情・親近感・孤独に対する関心や孤独を共有しようとする心理の芽生え	
第二次感想文	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごんは、ひとりぼっちだから、いたずらをするのかなあ。ごんは、初めからいたずらばかりしていたのだろうか。お父さんやお母さんはどこへ行ったのだろうか。ごんがかわいそうだ。ごんは、お母さんから生まれてくるのに、お母さんはそのごんを見ずして行ってしまったのだろうか。(村上(男)) ・ ごんは、さびしがり屋だから、いたずらをすると思った。ごんは、かわいそうだなあ。山にはお父さんもお母さんもないし、それにいっしょに遊ぶ仲間だって、あまりいない。大きないたずらをするが、ほんとはやさしいんだなあ。(大山) ・ ごんは親兄弟がいなくて、さびしいだろう。かわいそうだ。(藤條) ・ 私が印しように残っているのは、ごんがひとりぼっちであなの中に住

「いたずら」との関連	
疑問・推測	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ お父さんやお母さん、姉・弟妹はいないのかなあ。どうしてごんは、いたずらをするのか。それはたぶん友だちがいなくてさびしいからだと思う。(藤田)
「ひとりぼっち」との関連を理解・「いたずら」の行為に対する弁護	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごんが、いたずらや悪いことをするのは、ひとりぼっちでだれも相手にしてくれないからだと思う。村が近いので、ついいたずらをしたくなるのだろう。(倉木) ・ いたずらをするのは、ひとりぼっちで、さびしいからだ。だから、兵十を見つけたとき、ついいたずら心が起きて、あんないたずらをしてしまった。(石戸) ・ いつもひとりぼっちだから、いたずらをして気持ちをまぎらしていると思う。(佐伯) ・ ごんは、ひとりぼっちだから、さびしいので、人間を相手にいたずらをして、遊んでいるつもりだと思います。(増田) ・ いつも、いたずらばかりしているけど、ほんとは家族も友達もいないから、さびしくて、いたずらをしていと思う。家族や友達がいたらいたずらなんかしなかったと思う。(木谷)

「悪いキツネ」のイメージ		
悪	いいやつ	弁 護
<p>すぎる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ こんぎつねは、ちょっと悪すぎる。兵十がはりきりあみで取ってビクの中に入れている魚を、はりきりあみの外側に投げすてた。兵十がおつかあに食べさせようと思っていた魚は、全部逃されてしまった。そして、兵十のおつかあは死んでしまった。こんなごんは、きつと悪いこととで有名なきつねなのだろう。(西浦) 	<p>いいやつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ごんは、悪いやつなのか、いいやつなのか、どっちだ。ぼくは、いいやつだと思っている。(阿河) 	<p>弁 護</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ んが、なぜいたずらをするかという、ごんのお母さんや兄さんが殺された、つかまえられたりしたからだと思う。(牧野)

① (考察) 第一次感想文では、

。「悪いキツネ」というイメージが強い。
 。「いいキツネ」↕「悪いキツネ」という図式的な把握になっている。
 どのように「悪いキツネ」なのか、具体的には記述されていない。

② 第二次感想文では、

。「いたずら」に対する「悪い」というイメージが希薄化している。
 。 具体例を正確に挙げて、印象に残っている「いたずら」の行為を記述している。
 要するに、第二次感想文では、「いたずら」の行為に対する評価に変容が生じてきている(評価の観点の多様化)。これは、「ひとりぼっち」の境遇に対する認識の深化により、同情や共感が形成されてきていることと密接に関連している。
 (3) 「やさしさ」に対する認識深化・共感形成
 「やさしさ」に関する第一次と第二次の感想内容を整理し比較して示すと、次表のとおりである。

〈表④〉「やさしさ」に関する感想内容の変容 (傍線引用者)

「やさしさ」の内実		
無	記 述	
<p>・ こんは、くりや</p>	<p>・ こんぎつねはやさしいと思う。(桐山) ・ いたずらをするけど、やさしいところもある。(赤沢) ・ 最初はいたずらばかりしていたけど、やっぱり人思い。(阿河)</p>	<p>第一次感想文</p>
<p>・ こんが、くりをどっさり拾ってきたこと</p>	<p>・ こんは、いたずらばかりするけどやさしい心を持っている。(藤條)</p>	<p>第二次感想文</p>

「やさしさ」の内実

行為と動機を記述

いわしのことで、兵十にめいわくをかけた	兵十のおっかあが死んで	いたずらを、悪いと思
<p>私は、ごんが小さい手で、どっさりくりやまつたけを持って来たところを思い浮かべると、とてもごんがすきになる。ごんはいわしのことで兵十にめいわくをかけたけど、やさしい。ごんに会えるなら、一回会ってみたい。(樺山)</p> <p>兵十のおっかあが死んだのを知ると、自分のせいだと思っていわしを兵十の家に持って行き、兵十がいわし屋にぶんなぐられたことを知ると、今度は気の毒に思っ</p>	<p>兵十のお母さんが死んだのを知って、毎日日をつぐないをした。(赤沢)</p> <p>ごんぎつねは、兵十のおっかあが死んでから、急にいいことをするようにになった。(佐伯)</p> <p>兵十のおっかあが死んでしまってから、ごんのつぐないは始まった。(藤田)</p>	<p>兵十にいたずらをして、自分が悪かったなあと思って、すぐに松たけを持って行ってあげている。(牧野)</p> <p>ごんは、いたずらばかりしているけど、そのいたずらがとても悪いことだったとわかると、つぐないをするという、ほんとうはやさしいきつね。(増田)</p>

(考察)

① 第一次感想文では、

。「やさしさ」の内実として、「くりやまつたけを持って行った」行為のみを記述している。

。ごんぎつねの人物像を「やさしい」「人思い」「よいところ」等を含む)として評価するに際し、「いたずら」の行為を対立的に取り上げて記述している。「いたずらはするけど、やさしい」等——赤沢・阿河・木谷・樺山)

これに対して

② 第二次感想文では

。「やさしさ」の内容として、行為と動機とを具体的に記述している。
。ごんぎつねの人物像を「やさしい」として評価するに際し、「いたずら」の行為は負の要素ではなくなり、むしろその「いたずら」に対して自責の念を有している点に「やさしさ」の側面を見いだしている。

。ごんぎつねの「やさしさ」に対し、共感や感動形成の芽生えが見られる。——小松・石戸・樺山、等)

2 第一次感想文↓第二次感想文↓第五次感想文における認識の深化・共感形成

「ひとりぼっち」の境遇・「いたずら」の行為・「やさしさ」について記述している第一次、第二次、第五次の感想文の変容を、それぞれの記述過程において整理して示すと次表のとおりである。

〈表⑤〉 第一次・第二次・第五次感想文における「ひとりぼっち」

の境遇、「いたずら」の行為、「やさしさ」に関する感想内容

りやまつたけを毎日持って行っている。ほんとうに心のやさしいきつねだ。(加藤)

の変容過程

第二次感想文	第一次感想文	
<p>11名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 同情・親近感の芽生え <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんやお母さん、友だちがいなくてかわいそう。 ・ひとりぼっちで、さびしくないのかなあ。 ○ 「いたずら」の行為を弁護しようとする心理 <ul style="list-style-type: none"> ・家族や友だちがいたら、いたずらなんかしない。さびしいから、相手にしてもらいたくていたずらをしている。 	<p>2名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 境遇に対する素朴な疑問 <ul style="list-style-type: none"> ・どうして、「ひとりぼっち」なのだろう。 ○ 「いたずら」との関連を推測 <ul style="list-style-type: none"> ・ひとりぼっちでさびしいからいたずらをするのだろうか。 	「ひとりぼっち」の境遇
<p>8名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「悪いきつね」のイメージが薄れてくる。 <ul style="list-style-type: none"> ・印しように残った。 ・おもしろい。 ・ごんぎつねの悪い部分は、この点だ。 ・ほんとうのごんは、やさしい。 	<p>5名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「悪いきつね」のイメージ <ul style="list-style-type: none"> ・いたずらばかりすぎる。 	「いたずら」の行為
<p>20名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「やさしさ」の内実として、動機と行為を具体的に詳述（行為） <ul style="list-style-type: none"> ・くりばかりでなく、まつたけも二・三本持って。 ・いわしをぬすんでまでも。等 ○ 「いたずら」は、「やさしさ」の対立要素ではなくなる。（「いたずら」を自責している点に「やさしさ」の動機を見ている。） <ul style="list-style-type: none"> ・自分のせいで、兵十のおっかあが死んだと思ひ。 ・うなぎをとって、悪いと思ひ。等 ○ 共感・感動の芽生え <ul style="list-style-type: none"> ・なかなか、責任感を強く感じるきつねじゃないか。 ・ごんが小さな手で、どっさりくりやまつたけを持って来たところを思ひうかべると、とてもごんがすきになる。（中略）ごんに会えるなら、一回会ってみたい。等 	<p>9名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「やさしさ」の内実として、単一行為を指摘 <ul style="list-style-type: none"> ・「くりやまつたけを持って行った」 ○ 「いたずら」と対立させて評価 <ul style="list-style-type: none"> ・いたずらをするけれども、やさしい。 	「やさしさ」

第五次感想文	考	察
<p>13名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 共感の形成 — 事件回避への思い — <ul style="list-style-type: none"> ・父母はどこへ行ったのかなあ。父母がいたらこんなことにはならなかった。 ・ごんになかまがいて、なかまといっしょにくりやまつたけをとどけたら、この事件はさげられたのに。 ・友人がいたら、いたずらなんかしないし、死ぬようなことはなかった。 	<p>○ 「ひとりぼっち」の境遇に対する認識の深化と共感形成、「やさしい」の行為に対する「共感・感動の芽生え」が観察される一方、「いたずら」の行為に対しては反感や悪いイメージが希薄化して行く。</p>	<p>○ 「ひとりぼっち」の境遇に対する認識が深化し、同情・共感が芽生えてくることにより、「いたずら」に対して一定の理解を示すようになる。</p>
<p>2名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「いたずら」は、ほとんど問題にならなくなる。事件を回避したい念から、兵十の責任を問う形になる。 <ul style="list-style-type: none"> ・私が兵十だったら、以前のいたずらのことなんか気にせず、その場をじっと待って、ごんの様子を見ていたと思う。 		<p>○ 「いたずら」と「やさしさ」の関係認識（「いたずら」の行為に対する自責が「やさしい」行動の動機になっている）が深化することにより、「いたずら」は「やさしさ」と対立する負の要素ではなくなる。</p>
<p>9名</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 感動・崇敬の念の形成 <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくは、ごんみたいなやさしいきつねは、これから先、二度と現れない、と思う。 ・ごんぎつねは神様だったと思う。（中略）ぼくも加助と同じで、神様だと思った。くりやまつたけを毎日毎日持って行ってあげるなんて、まるで神様みたいだ。ふつうのキツネにはできないことで、人間でもむずかしいことだと思ひます。 		<p>○ 「やさしさ」に対する共感や感動の芽生えが生じてくる。</p>

一〇九
ごんぎつねの文学の授業六年(二)
「感動」の形成過程に関する考察
(北)

(考察)

① 「ひとりぼっち」の境遇に関しては、

・ 感想量の増加

読みにおける認識の深化に伴い、作品の基底にある「ひとりぼっち」の心情に突き当たっていくようである。(児童の読みにおいても、孤独感の本作品を貫くキーワードになっている。)

・ 共感形成がなされる。

基調にあるのは、事件回避への熱烈な思いである。(なかまさえいたら、こんな事件にはならないのに。)

② 「いたずら」の行為に関しては、

・ 感想量の減少

認識の深化に伴い、「いたずら」の行為に対し「悪い」イメージが払拭されていく。「いたずら」はほとんど問題にならなくなってくる。—— 結末が死で終わることも関係しよう。)

③ 「やさしさ」に関しては、

・ 深い感動が形成される。

結末が悲劇であることにより、主人公の「ひとりぼっち」の境遇に対して同情や共感が増幅されると同時に、その死を賭した「やさしい」行為に対して深い感動形成がもたらされる。

(二) こんぎつねの生き方

——「ぐったりと目をつぶったまま、うなずいたときの心情(第三次感想文)——

三次感想文

こんぎつねの生き方に対する児童の読みの内容については、前期の心情に焦点化して感想文を記述させている。その心情に関する感想内容については、小学四年生の場合と比較して別稿(一)で論及しており、本稿では省略する。

(三) 兵十の生き方

——草稿「前文」を教材として読み深めた後に、「その後の兵十」

の題で記述(第四次感想文)——

兵十の生き方に対しては、多くの児童が豊かな感想を溢れんばかりに記述している(別稿(一)の「備考」(3)を参照)。該当する記述内容を抜粋して示すと次のとおりである。

△表⑥▽ 兵十の生き方に対する認識の深化・共感形成

ア、事件以後、兵十はどのように生きたか

- ・ 兵十がたぶん茂助じいだと思う。兵十は、ごんをうった後、すぐにりょう師をやめたと思う。「ごんのような、心やさしい動物がいるとは知らなかった。おれは、これまでもそんな動物を殺していたかもしれない。これからは、そんなことはぜったいしたくない」と思い、りょう師をやめたにちがいない。(大山)
- ・ 兵十は、もうりょう師をやめたと思う。子供に話を聞かせたり、みかんの皮をむいてやったりしたと思う。(大石)
- ・ 兵十は、およめさんをもらわず、さびしいひとりぐらしをして、ごんのおほかを守ってあげたと思う。生きているものを殺す悲しみを、ごんを殺してしまった時に思い、りょう師をやめて苦しい生活を送ったと思う。(桐山)
- ・ 兵十が茂助じいだと思います。理由は、兵十という人から聞いた話だと、何十年も前の話をこれほどくわしく話せるわけがない、と思ったからです。だから、本当に体験した茂助じいだから話せたと思います。茂助じいが、もし本当に兵十だったら、その後りょう師をやめて、年老いたら前書きにもあるように、仕事ができないから子守をしていたと思います。(徳山)
- ・ 兵十は、りょう師をやめて、年をとってしまったのだと思う。茂助じいが、きつと兵十だと思う。茂助じいは、こんぎつねというきつねの物語を大事にしたから、子供たちに話してやったと思う。(佐伯)

をうった後で、後かいして、ほかの動物をうたなくなったのかもしれない。

(山下)

・茂助じいさんが兵十だと思ふ。そして、ぜったいに墓を作つて、おつかあの墓とごんの墓をおがんだ。(石原)

・兵十はごんをうつてから、たぶんりょう師をやめたと思ふ。こんなことは二度としたくない、と思つてやめたと思ふ。(北垣)

・すぐ後かいし、ごんのおはかも作つて、花をあげて、毎日おがみに行つた。そして、ごんの気持ちがわかつて、今までいたずらばかりしてきたわけがよくわかつたと思ふ。それから、ごんのことをいつも考えながらさびしくなるとごんの墓のところへ行つて、ごんのことを思い出していたと思ふ。(木谷)

・兵十はごんをうつてからは、きつとりょうしをやめたと思ふ。ごんみたいなやさしい心のある動物がまだ山の中にいるかもしれないし、そんな動物たちをうつたらとてもかわいそうに思ひ、りょうしをやめたにちがいない。そして、仕事がなくなり、子守りをしていたんだと思ふ。(増田)

・たぶん兵十は、茂助だと私は思ふ。兵十はごんを殺してから、二・三か月たつてからりょう師をやめ、子守ばかりやっていると思ふ。そして、名前も何か月かたつたころに変えたと思ふ。(笠原)

・私は、ごんに仲間がいたら死ぬことはなかつたと思ふ。それに兵十も、ごんをうたずにいられたと思ふ。でも、動物でもごんのように「人間の心」をもつた動物がいることを兵十は知つたと思ふ。それから、ごんが死んだ後、すぐにお墓を建て、りょう師もすぐにやめたと思ふ。(鴨谷)

・兵十は茂助じいで、茂助じいは兵十だと思ふ。兵十はごんをうつた後、深く後悔して、「りょう師」という自分の職業をやめたのだと思ふ。茂助じいは、南吉たちには自分の名を言わず、変えて話したと思ふ。(倉木)

・兵十はごんをうつた後、ごんのお墓を建てて、毎日おがんだと思ふ。それから、だんだん年老いてきて、りょう師もやめ、村の子供たちに若い頃の話をしたと思ふ。こうして考えていくと、なんだか兵十が年老いていくうちに、だんだん茂助に似てくる。やっぱり兵十は、茂助なのかなあ。(宮)

本)

・茂助じいは兵十だと思ひます。兵十は、ごんを火なわじゅうでうつた後すぐりょう師をやめたと思ひます。あんなにいいキツネを殺した自分にはりょう師をやる資格はないと思ひていたと思ひます。(村上女)

・ごんをうつてしまつて、兵十はごんの墓を建ててあげて、りょう師をやめたと思ふ。ごんみたいに、悲しい事件を起こしてはいけなと思つて、やめたと思ふ。(加藤)

・私は、兵十はぜったいに茂助だと思ふ。兵十はごんをうつてしまつた後、ごんの気持ちを分かつてやれなかつたことで深く後悔し、ショックを受けたと思ふ。だから、もちろんりょう師はやめただろうし、しばらくは何もやる気はなかつたんじゃないかと思ふ。それから、何十年もたつて、兵十(茂助)が子ども達に何回もこの話をしたのは、子ども達に動物の気持ちを分かつてあげて、動物と仲よくしろということ、伝えたかつたのだと思ふ。だから、兵十はごんをうつてしまつた後、心を入れかえて、動物と子供を愛するやさしい人になつたんだと思ふ。もしごんが、兵十が子ども達に自分の話をしてるのを天国から見つたら、きつと満足したにちがいない。(石戸)

イ、兵十(茂助爺)は、どんな思ひを込めてこの物語を子どもたちに語つたか。

・茂助じいは、この話を何度も子ども達に話したにちがいない。そして、ごんのようなやさしい動物がいるということを知つてほしかつた、と思ふ。(増田)

・茂助じいが、南吉たちにこの物語を話したのは、いろいろな理由があると思ふ。

一つめは、動物の中にも心のやさしい動物がいるということ。

二つめは、自分が思つたことをすぐやるといふことはいいことだけど、悪

い場合もある、ということ。

三つめは、むやみに動物をうってはいけない、ということ。

その他にも、もつとあつたと思う。

茂助じいは、南吉たちにごんの話をするとき、心の中ではしずかに泣いていたと思う。(倉木)

もし、茂助じいが兵十だったら、どんなに悪いぬすつとぎつねでもやさしい気持ちを持っていることは、人間と同じなのだとすることを、子供達に伝えたかったのだと思う。茂助じいが兵十ならば、ごんをうって、ごんの気持ちがあつて、りょうしをやめていると思う。(大沢)

茂助じいは、自分の体験があつたからこそ、子ども達に話せた。ぼくは茂助じいくらいにやさしい人でないと話せなかった、と思う。子ども達にこの話をしてる時の兵十は、たぶん「おれと同じ、こんな体験をさせたくない」と思ったにちがいない。子ども達も、この話を聞いて印象に残ったと思うけど、それだけ茂助じいは真剣になつて話した。茂助じいの心の中には、ごんをうってしまつてとてもはずかしい、と思う気持ちが強い。

(牧野)

子ども達に、ごんのような「人間の心」を持った動物もいるということをおぼえてほしかったんだ、と思う。(赤沢)

茂助じいは、二度と過ちを犯すことのないように、近所の子ども達に語つたのだと思う。茂助じいは、死ぬまでごんのことを思い続けていたと思う。(藤田)

茂助じいも、動物の気持ちを分かつてやろうと思ひながら「ごんぎつね」の話をしてやつたんだと思う。一つしかない命を大切にしようと思ひながら、毎日話していたと思う。(西浦)

「ごんぎつね」の話は、茂助じいが若いときに体験したことだと思ひながら、ごんをうって、ひどく後かいして、りょうしをやめたのだと思う。茂助じいは、自分が情けなかつたと思う。何十年もたつてから、自分と同じようなことは子ども達にしてほしくない、と思ひながら話したと思う。私も兵十の立場だったら、ごんを殺してしまつてはいるかもしれない。「何もわ

からないで、悪いと決めつけることは、とてもよくない」と思った。(樺山)

「ごん、ごめんよ。」と心の中で言いながら、このお話を子ども達に語つていた。(福山)

この子ども達には、このような過ちを犯してほしくない、人の気持ちを深く考える子どもになつてほしい、と思つて話したと思う。(加藤)

悪い人でも、必ずいい心を持っていて、動物だつてむやみに殺してはいけないことを、子ども達に言い聞かせたいと思つて話してやつた。(石原)

どんなに悪いキツネや、悪い人がいても、よい心だけはだれにもあること、たとえ動物といえ、命だけはいっしょなんだ、ということをおぼえて何回も何回も子ども達に語つたんだと思ひます。(阿河)

いずれの表においても兵十の深刻・痛恨・願望の心情が、児童により記述されている。ア表では、ごんぎつねというあたかも天使のようにやさしくかわい人物を自らの手で殺してしまつたことに対する悲嘆を、イ表では同じ過誤を再び繰り返すことのないように人(動物)の心の美しさ・命の重さを記述している。それぞれの表から、文例を二・三抽出し次に掲げてみる。

(ア表より)

兵十はごんをうつてからは、きつとりようしをやめたと思ひ。ごんみたいなやさしい心のある動物がまだ山の中にもいるかもしれないし、そんな動物たちをうつたらとてもかわいそうに思ひ、りょうしをやめたにちがいない。そして、仕事がなくなり、子守りをしていただと思ひ。(増田)

私は、兵十はぜつたいに茂助だと思ひ。兵十はごんをうつてしまつた後、ごんの気持ちを分かつてやれなかつたことで深く後悔し、ショックを受けたと思ひ。だから、もちろんりょうしはやめたであらうし、しばらくは何もやる気はなかつたんじゃないかと思ひ。それから、何十年もたつて、兵十(茂助)が子ども達に何回もこの話

をしたのは、子ども達に動物の気持ちを知ってあげて、動物と仲よくしろということ、伝えたかったのだと思う。だから、兵十は「ごんをうってしまった後、心を入れかえて動物と子どもを愛するやさしい人にならなう」と思う。もし「ごんが、兵十が子ども達に自分の話をしているのを天国から見たい」としたら、きっと満足したにちがいない。(石戸)

(イ表より)

。茂助じいが、南吉たちにこの物語を話したのは、いろいろな理由があると思う。

一つめは、動物の中にも心のやさしい動物がいるということ。

二つめは、自分が思ったことをすぐやるということはいいいことだけれど、悪い場合もある、ということ。

三つめは、むやみに動物をうってはいけない、ということ。

その他にも、もつとあつたと思う。

茂助じいは、南吉たちに「ごん」の話をするとき、心の中でははずか泣いていたと思う。(倉木)

。どんなに悪いキツネや、悪い人がいても、よい心だけだれにもあること、たとえ動物といえ、命だけはいっしょなんだ、ということ、を伝えたくて何回も何回も子ども達に語つたんだと思います。(阿河)

。茂助じいは、自分の体験があつたからこそ、子ども達に話せた。

。ぼくは、茂助じいにくらいにやさしい人でないと話せなかつた、と思う。子ども達にこの話をしている時の兵十は、たぶん「おれと同じ、こんな体験をさせたくない」と思ったにちがいない。子ども達も、この話を聞いて印象に残つたと思うけれど、それだけ茂助じいは真剣になつて話した。茂助じいの心の中には、「ごんをうってしまったとて

もはずかしい、と思う気持ちが強い。(牧野)

二 意欲の形成過程に関する全体的考察

第一次・第二次・第五次感想文および「一口感想」の文章記述中より、

意欲に関する記述を取り出し、整理したのが次表である。(各次の感想文、毎時間授業終了時に記述している「一口感想」の実施日は、別稿(一)に掲げる「指導過程一覧」のとおりである。)

△表⑦▽ 意欲の形成過程の分析

(傍線引用者)

第一次感想文記述段階 (第1時～2時)		形成過程	児童の意欲記述内容
第2時 (第一次感想文)	第1時 (「一口感想」)		
抵抗感 (二回勉強しても、おもしろくない。)		要点	児童の意欲記述内容
<ul style="list-style-type: none"> 意味の分からないことばがある。 うそっぽい。 	<ul style="list-style-type: none"> 二回勉強しても、おもしろくない。 	<ul style="list-style-type: none"> どうして、二度も勉強しないといけないのか。 	<ul style="list-style-type: none"> なんで、「ごんぎつね」の勉強を二度もやらあかんのや。(藤條)
<ul style="list-style-type: none"> 意味の分からないことばがたくさんあつた。(大山) 「ごんぎつね」を聞いて、なんとなくうそっぽい感じがする。どんなところがうそっぽいかわからなくて、ごんがいわしをぬすんできたり、くりやまつたけを持ってきては兵十の家 	<ul style="list-style-type: none"> 二回勉強しても、おもしろくない。(小松) 四年生のとき習ったから、あまりおもしろくない。(西浦) 一度読んでいたので、聞いてもあまりおもしろくなかつた。(笠原) 一度勉強したので、おもしろくなかつた。(村上女) 		

第二次感想文記述段階 (第3時～7時)			
第4時(「一口感想」)	第3時(「一口感想」)		
← 興味・意欲の喚起 (疑問・次が楽しみ・よく分かる・発表できてよかった。グループでの学習は分かりやすい。)			
<ul style="list-style-type: none"> ・疑問 	<ul style="list-style-type: none"> ・前書きのところがよく分かった。 ・どんな勉強をするか楽しみ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろくない。 ・疑問 	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいそらはいや。
<ul style="list-style-type: none"> ・兵十は足がおそいと思う。魚をとってしまつたら、なんであかんねん。(清原) ・なんで、ごんはいたずらやいやがらせばかりするんだろう。いやがらせやいたずらをせずに、いいことばっかししたら村人に好かれると私は思う。なんで、ごんは悪い知恵ばっかし働くんだろう。いいことは考えられない 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は、前書きのところで、すごく分かってきた。一行のことばに、いろいろ意味があるんだなあ、と思った。大変よく分かった。(樺山) ・今日は、ごんのいろいろな気持ちを話し合いました。今度はどんな勉強をするか楽しみです。(大山) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ぜんぜん、おもしろくなかった。(清原) ・なんで、ごんはいたずらばかりするのか分からない。なんで、ごんはひとりぼっちなんだろう。お父さんやお母さんや兄弟はいないのかなあ。(藤條) 	<ul style="list-style-type: none"> ・この話はかわいそうだから、読んだりするのはいやだった。(樺山)
に置いて行ったりするところが、きつねがそんなことするのかなあ、と思ったりする。(牧野)			

第二次感想文記述段階 (第3時～7時)			
第5時(「一口感想」)	第4時(「一口感想」)		
← 興味・意欲の喚起 (疑問・次が楽しみ・よく分かる・発表できてよかった。グループでの学習は分かりやすい。)			
<ul style="list-style-type: none"> ・だんだん、おもしろくなってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで考える方がいい。 ・グループの方が分かりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を聞いてほしかった。 ・ひさしぶりに、手をあげてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はりきりあみ」のことがよくわかった。 ・ごんの性格がよく分かった。 ・次が、楽しみ。
<ul style="list-style-type: none"> ・だんだん、おもしろくなってきた。(清原) ・このように勉強してみると、いろいろ疑問が出てきて、おもしろいと思う。読み深めていくと、さらにごんがやさしいことが分かってきた。(鴨谷) 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で考えるより、やっぱりみんなで考える方がいい。(牧野) ・最後に言いたいことがあったのに、言えなかった。班の方がすぐ分かって、やりやすいし、よいと思う。グループで相談できるから。(樺山) 	<ul style="list-style-type: none"> ・最後にも線を引いたところがあるのに、聞いてほしかった。わりと線を引くところが増えてきたし、手も上げるようになってきたのがうれしい。(鴨谷) ・ひさしぶりに手をあげてよかった。(大石) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はりきりあみ」って、どんな形かが分かった。そうすると、ごんはそうとう悪がしいんだなあ。(阿河) ・ごんは、なかなかおどろびよう者だなあ。今度は、兵十の性格を知りたい。(大山) ・ごんは、なかなか頭がいいなあ、と思った。次はどんなことをするか、楽しみです。(増田)
いのかなあ。(藤條)			

第二次感想文記述段階(第3時~7時)	
第7時(第二次感想文)	第6時(「一口感想」)
<p>← 意欲の盛り上がり (4年との比較・もっと勉強したい) ←</p>	
<ul style="list-style-type: none"> 4年で気にしていなかったことや、疑問がたくさん分かってきた。 だんだん、おもしろくなってきた。もっと勉強したい。 資料が多いから、いろいろ分かっておもしろい。 	<ul style="list-style-type: none"> くわしく調べていくと、おもしろくなってきた。 手を上げたら、2回も当たった。 発表しようと思っていたことは……
<ul style="list-style-type: none"> これから、まだ分からないことや、意味などが分かってくると思う。(阿河) 四年では気にしていなかった「キス」や「赤い井戸」のことや、疑問に思っていたことが今度の勉強でたくさん分かってきた。(石原) これから楽しみます。(大山) ごんは、一体どういうことになるのか、楽しみです。(佐伯) だんだんおもしろくなってきたので、もっと勉強したいと思う。(笠原) 四年生でやったときは、わりにくわしくやっていたけど資料とかは使わなかった。だから、 	<ul style="list-style-type: none"> 最初は、「ごんぎつね」だと思っておもしろくなかったけど、くわしく調べていくと、おもしろくなってきた。(宮本) 今日は、久しぶりに発表した。みんなで考えたことを言った。班で、みんなで手を上げなあかと互いに決めていたので、上げたら二回も当たってしまった。(徳山) 発表しようと思っていたけど、言えなかったことは、「ごんが山でくりをどっさり拾って」とあるけど、何個ぐらいだろうとか、兵十のほったの傷がどうしていわし屋にぶんなぐられた、ということが分かるのか、というところ。(小松) うなぎをとって持ってきたらええねん。くりでも食べられるからええ。まつたけもうまいからええ。(清原)

第五次感想文記述段階(第14時)	
第14時(第五次感想文・「一口感想」)	
<p>←</p>	
<ul style="list-style-type: none"> いい感想文が書けた。 この勉強では集中できた。 「ごんぎつね」を勉強できて、本当に良かった。 グループで学習すると、いろいろな意見が出てきたり、いろいろなことが分かる。 それにしても、おもしろい物語だった。 	<p>今やっている勉強は資料が多く、いろいろ分かってすぐおもしろい。(樺山)</p> <ul style="list-style-type: none"> これで、やっと「ごんぎつね」の感想文が全部終わった。感想文は短かったけど、いい作品が書けたと思います。(阿河) この「ごんぎつね」を勉強して、ぼくはとても良かったと思う。ぼくはできることしか集中できないけど、この勉強では一生けんめいになれて、集中できた。(牧野) 私は、動物と人間が出てくる本はたいてい好きだけど、この話はその中でもすごく好きです。ごんぎつねを勉強できて、本当に良かったです。(石戸) 私は四年生のときの勉強でおぼえているのは、ごんはいたずら者で、最後がかわいそうだったことだけだった。(中略—引用者) この勉強をしてよかったですと思いました。(宮本) 今まで勉強して感じたことは、一人ではこんなにも勉強できなかったらうということ。やっぱりグループで組んで学習するといろいろな意見が出てきたり、いろいろなことが分かるから、「ごんぎつね」をやったよかったなあ、と思う。(宮本—「一口感想」) 以前にはくわしく読んでなかったけど、最近はずいぶん読むようになった。ごんの気持ちがよく分かってきたし、疑問もたくさん出てきて、みんなで話し合ったりしたので

第五次感想文記述段階(第14時)

第14時(第五次感想文・「一口感想」)

<ul style="list-style-type: none"> ・ごんぎつねと兵十は、この物語の中で生きている。 ・とても、美しい話でした。 ・勉強しているときは、本当にあったような感じがした。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・この「ごんぎつね」は単なる話にすぎないのに、勉強しているときは、本当にあったような感じがした。(木谷) ・ごんぎつねと兵十は、たぶん実際に存在したと思います。確証はないけれども、少なくともこの物語の中で生きていると思います。(藤條) ・この物語は、とても美しい話でした。(笠原) 	<ul style="list-style-type: none"> ・もよかった、と思う。(鴨谷―「一口感想」) ・それにしても、おもしろい物語やっと思おう。最後に兵十に言いたいことがある。「いい心をふやそう！」(清原) ・「ごんぎつね」を勉強して、ごんの心の中や作者のことがいろいろ分かった。二度目だけど、思ったよりおもしろかった。(北垣) ・今まで勉強してきて、私はおもしろかった。「ごんぎつね」の話を、いいと思った。(佐伯)
<ul style="list-style-type: none"> ・「ごんぎつね」を勉強して、いろいろなことが分かった。たとえば兵十の家の井戸はどんな井戸かと言うことです。四年生で習ったときは、こんなことは分からなかった。またごんはどんなキツネか。とても、やさしいキツネだと分かった。ほんとうは、みんなとてもやさしいんだと思った。勉強してほんとうに良かったと思う。(大沢―「一口感想」) 	

第五次感想文記述段階(第14時)

第14時(第五次感想文・「一口感想文」)

<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなことが、この物語の中にあつた。 ・くわしく勉強したら、この話はかわいそうではなくなった。 ・動物も、人間と同じように、悪いところもいいところもある。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・「ごんぎつね」を学習して、四年生のときとやり方がだいぶちがうと思った。四年生のときは単純だった。話の内容はいっしょだけど、今のようにくわしくやっていない。新美南吉が二十九歳で病死したとか、ごんが権現山にひとりぼっちで暮らしていたとか、まだ他にもたくさんある。(西浦) 	<ul style="list-style-type: none"> ・やっと終わったと思う。いろいろなことがこの物語の中にあつた。(頭山) ・ただ単に、ばつと読んだだけだったらこの話はかわいそうだけど、ちゃんとやったら、そんなにかわいそうだと思わなかった。(樺山―「一口感想」) ・「ごんぎつね」を勉強するようになったとき、「なんでおれらの組だけ一回やっただ勉強を二回もやらなあかんのや」と思っていた。でも、何回か勉強しているうちに、「動物も生き物、人間と同じように悪いところもあれば、いいところもある」という気持ちが強くなってきた。でも、心の中でそう思っているも、動物の長所・短所、その中でも短所はよく分かって長所はあまり分からない。犬や猫などを飼っている家の人でも、自分の家で飼っている動物の長所はあまり分かっていないと思う。だから、兵十の場合も、ごんの責任の強さという長所を見ぬいたら、ごんをうたなかつたかもしれない。(小松)

第五次感想文記述段階（第14時）

第14時（第五次感想文・「一口感想文」）

充実感・満足感の形成

この勉強では集中できた。おもしろい物語だった。ごんと兵十は、この作品の中に生きている。四年生のときよりもずっとよく分かった。せいいっぱいがんばりました。まだ、やりたいたい。

- ・今日は最後の「ごんぎつね」の勉強だった。でも、まだやりたい。
- ・今日は、最後の授業なので、せいいっぱいがんばりました。
- ・また、「ごんぎつね」のような学習をしたい。
- ・もっと、長い話だったら良かった。

- ・4年生のときと、やり方がちがう。
- ・くわしく勉強したら、いろんなことができた。ずいぶん、よくわかった。

・今日は、最後の「ごんぎつね」の勉強だった。でも、まだやりたい。（村上明）——「一口感想」

もう、こんな「ごんぎつね」のような勉強はしないのではないか。今日は、最後の授業なので、せいいっぱいがんばりました。（村尾——「一口感想」）

・この話を勉強しておもしろかったことは、グループで話し合いができた、他のグループの人の考えが聞けたりしたこと。また「ごんぎつね」のような話の学習をしたいと思います。（山下）

・平野（この小学校の所在地——引用者注）にこんな事件が起こったら、どうなるのかなあ、と思った。もっと長い話だったら良かった、と思う。（大山）

は、いたずらして兵十のおつ母を死なせて、最後に殺されたとだけ思ったけど、くわしくやったらいろんなことが出てきた。（西浦——「一口感想」）

・四年生で習ったとき、あまりよく分からなかったけど、六年生で深く勉強して、この話で言いたいことがよく分かりました。（赤沢——「一口感想」）

・「ごんぎつね」を勉強して、四年生のときに学習したよりもずいぶんよく分かった。（倉木）

・あまり、おもしろくなかった。

・「ごんぎつね」って、あまりおもしろくなかった。ごんが初めにあんなことするから、こういうことになった。この話の中で、ごんの仲間が出てこないところがあまりおもしろくなかった。仲間が出てこなかったら、おもしろくない。（大石）

（考察）

本表を簡略化すれば、各次の感想文記述段階における意欲形成は、次のようになろう。

（第一次感想文記述段階）

抵抗感

（読み深）
興味の喚起

（第二次感想文記述段階）

意欲の形成

（読み深）
感動形成

（第三次感想文記述段階）

充実・満足感の形成

三 認識の深化・共感の形成・意欲の形成過程に関する個別考察（十二例）

（一）ごんぎつねの人物像等と兵十に対して、顕著な変容が認められる児童

① 牧野健次

(傍線引用者)

第一次感想文		認識の深化・共感形成過程	
	ひとりぼっち	ごんぎつねの人物像	意欲の形成過程
	いたずら	やさしさ	
		兵十	
	・ なんと なく、う そつぽい 感じがす る。どん なところ かと言う と、ごん がいわし をぬすん だり、松 たけを持 って来て は兵十の 家に置い て行った り、きつ ねがそん なことで きるかな あ、と思 ったりす る。		

第二次感想文	「一口感想」
	・ 今日、ごんがいたずらをして、反省しているところを勉強した。ごんはやさしいんだなあ、と分かった。 (11/8)
・ ごんがどうしていたずらをするかというところ、ごんのお母さんや兄弟が殺されたり、つかま	・ ごんは責任感が強いなあ、と思う。兵十のとときだけ、ごんはお返しをするのかなあ。そのれとも、他の人の場合でも、お返しするのはなあ。(11/9)
	・ みんなで話し合っつて、割合早くできた。一人でも考えるより、やっぱりみんなで考える方がいい。(11/7)

第三次感想文	「一口感想」	第二次感想文
<p>・ごんは、「中山」という山の中に「ひとりぼっちで住んでいました」のとき、お母さんの</p>	<p>・ごんはなぜ、みんなのところへ行かないのかなあ、と思った。でも、後でごんは兵十のことを好きだから、みんなのところへ行かないと分かった。同じ一人ぼっちというところもあるだろうけど、兵十のどんなところがいいのかなあ。ごんがうなぎのつぐないで、くりやまつたけを持って行くのは相手が兵十だからかなあ。それとも、加助にいたずらをした場合でも同じかなあ。(11/14)</p>	<p>えられたりしたから。</p> <p>・ごんはいたずらぎつねだけど、僕はとてもやさしいきつねだと思う。兵十にいたずらをして、自分で悪いなあと思って、くりやまつたけを毎日持って行ってあげたりしているから。</p>
<p>・ごんがくりやまつたけを持ってきていることが分かって、兵</p>		
<p>・ほくははじめ「ごんぎつね」をやったけど、だん</p>		

第三次感想文

<p>最後に、この「ごんぎつね」では新美南吉がごんで、</p>	<p>ろで、ほんとうはごんはそのときから、兵十のことが気になっていったのかなあ、と思う。だから、ごんは仲間のところへ行かない、と思った。</p>	<p>ためにもうなぎをとって、そのやさしい行為のためだと思おう。兵十のやさしさというものが、ごんの心を変えた。</p>
	<p>・第四章の「ごんはぶらぶら遊びに出かけた」のところで、ごんはもういたずらをしていないことが分かる。なぜかという点、ごんはすっかり変わってきているからです。</p>	<p>・ごんはぶらぶら遊びに出かけた「ごんはぶらぶら遊びに出かけた」のところで、ごんはもういたずらをしていないことが分かる。なぜかという点、ごんはすっかり変わってきているからです。</p>
		<p>十は後悔したと思おう。</p> <p>だんおもしろくなってきた。やる気が出てきた。</p>

第 四 次 感 想 文

Blank space for the main text of the reflection.

M さんが兵十になって、自分のくやしき、病気のくやしさを、この作品に書いたのだなあ、と思った。

・ 茂助じ
いくらい
やさしい
人でなげ
れば、こ
んな体験
はできな
いし、子
どもたち
にも話し
てやれな
い、と思
う。なぜ
かという
と、兵十
が母親思
いであつ
たからこ
そ、ごん
の気持ち
は変化し
たのだけ
ら。
兵十は
ごんをう
つてしま

第 四 次 感 想 文

Blank space for the main text of the reflection.

つてから
りよう師
をやめた
と思う。
そのショ
ックは一
生残った
のだと思
う。兵十
はたぶん
ごんをう
つてから
心の持ち
方を変え
たのだと
思う。ど
のように
変わった
かという
と、それ
まで以上
にやさし
い人にな
ったので
はないか。
母親や人
間に対し
てだけで
なく、動

第四次感想文

第五次感想文

<p>ぼくは、 どんがどう してひとり ぼちちで住 んでいるの か分からな い。なぜ、 仲間のとこ ろへ行かな いのか。そ れはどんに しか分から ない。(どん の心の奥 の求愛感情 を意味して いる？— 引用者注)</p>	
<p>ぼくは、 どんみたい なやさしい きつねは、 これから先 二度と出て こないと思 う。</p>	
<p>どんと 出会う以 前は、母 親とか、 親友とか 人間の気 持ちを分 かってあ げていた やさしい 人だった と思う。 どんを殺 してから は、生命 の宿って いるもの のことを 理解でき どんに会</p>	<p>物や命あ るすべて のものに 対してや さしくな ったので はないか と思う。</p>
<p>この話 は、新美 南吉の体 験がその まま「どん んぎつね」 に変わっ たのだと 思う。だ から、こ の話はこ の世の中 に実際に 起きたこ とになる。 このどん ぎつねを 勉強して ぼくはと てもよか</p>	

第五次感想文

<p>う前より もやさし くなつた のだと思 う。 なぜ、 こんな悲 しいこと が起きた のかは、 二人とも やさし ぎたため だと思 う。 どんは兵 十のため に、くり やまつた けを持っ て行って やりすぎ 兵十は母 親のうら みをもち すぎてこ んなこと になつた のだと思 う。そし</p>	<p>つたと思 う。ぼく は、でき ることだ けしか集 中できな いけど、 この勉強 では集中 できた。</p>
--	---

	第四次感想文	第三次感想文
		ごんの生まれ変わり・作品執筆のモチーフ ←
<ul style="list-style-type: none"> ごんみたい なやさいいき つねは、これ から先は、二 		<ul style="list-style-type: none"> 新美南吉が ごんで、M子 さんが兵十。 自分のくやし さ、病気のく やしさを作品 に書いた。
	兵十の生まれ変わり ←	特に変哲のない感想内容 ←
<ul style="list-style-type: none"> ごんも、兵 十も、やさし すぎたからこ の事件は起き 	<ul style="list-style-type: none"> 兵十は、母 親や人間に対 してだけでは なく、命ある すべてのもの に対してやさ しくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> やまつたけを 持つて来てい ることを知っ て、兵十は後 悔した。
		やる気が出てきた ←
<ul style="list-style-type: none"> この話は、 この世の中で 実際に起きた と言っつよ。 		<ul style="list-style-type: none"> 「ごんぎつね」 をやりたくな かったけど、 だんだんおも しろくなつて きて、やる気 が出てきた。

「一口感想」	第一次感想文	認識の深化・共感形成過程	
		人物像	兵十
<ul style="list-style-type: none"> ごんの住んで いる場所や、性 格がよく分かっ た。(11/6) 「はりきりあ み」って、どん 	<ul style="list-style-type: none"> いたずらばか りしているけど やっぱり人思い。 	ごんぎつね	意欲の形成過程
		最後の場面	兵十
	<ul style="list-style-type: none"> 分からず うったのだから、 兵十をゆるす と思う。 		

② 阿河政博 (傍線引用者)

第五次感想文
感動形成 ←
<ul style="list-style-type: none"> 度と出てこな い。
悲しい事件だが、起きてよかった ←
<ul style="list-style-type: none"> た。避けるこ とはできない。 しかし、この 事件が起きた ことはよかつ た。
充足感 ←
<ul style="list-style-type: none"> この「ごんぎ つね」を勉強 して、とても よかった。ぼ くは、自分に できることし か集中できな いけど、この 勉強では集中 できた。

	第二次感想文	「一口感想」
	<p>なつたら気がすむのかなあ。松たけは、そのころ安かったのだろうか。今だったら、一本五千円くらいするの。</p>	<p>な構造になって いるか、よく分 かった。ごんは 相当悪がしい んだなあ、と思 った。(11/7) ごんは、何で も、すぐに想像 する。(11/9)</p>
<p>ごんは、兵 十をうらまな いと思う。な</p>		
<p>兵十は、う ってしまった とき、どんな</p>		
		<p>これから、 また分からは いことや、意 味などが分か ると思う。</p>

第四次感想文	第三次感想文
	<p>ぜかという (中略—引 用者注)のい たずらもある し、ごんは兵 十と姿はちが うけど、好き だから。 うなずいた とき、ごんは 「元気で暮ら してくれ」と 思ったかなあ。 それとも、一 言だけ「あり がとう」と言 ってあげたか なあ。</p>
<p>兵十は、ごん をうったとき どんな気持ち だったかなあ。 今までのこと とか、ごん のこととか、も う気が混乱し ていたと思う。 何か心につき</p>	<p>気持ちだった かなあ。「し まった」と思 ったかなあ。 そうか、又は 「お前だった のか」と言う とき、泣きそ うだったと思 う。</p>

第五感想文	第四次感想文
<p>ぼくは、ごんぎつねは神様だったと思う。加助が「そりゃ、神様のしわざだ」と言ったことから考えてみると、ぼくも加助と同じで、神様だと思った。くりやまつたけを毎日毎日持って行ってあげるなんてまるで神様みたいだ。ふつうのきつねではできないことで、人間でもむずかしいことだと思う。</p>	
	<p>ささったような感じがすると思います。兵十が茂助じいだとしたら心の中にはこのことが一生残っていたと思う。</p>
<p>兵十は、ごんぎつねのことを後悔していると思う。(中略)引用者(茂助じい(兵十))は、もうこれからこんなことがないように、ぜったいに火なわじゆうを手にするのがなかったと思う。</p>	
<p>これでやっど、ごんぎつねの感想文がすべて終わった。感想文は短かったけどいい作品が書けたと思います。</p>	

「一口感想」		第一次感想文		
← 認識の深化		特に変質のない感想内容	人物像 ごんぎつね 最後の場面	認識の深化・共感形成
<p>ごんは、いつまで、何回つぐな</p>	<p>任んではる場所や、性格がよく分かった。ごんは、相当悪がしい。</p>	<p>いたずらばかりして、やっぱり人思い。</p>		
←	<p>ごんは、何でもすぐ想像する。</p>	兵十をゆるす		
←		<p>分からず、うったのだから、兵十をゆるす。</p>		
←		無記述	兵十	
←		無記述		意欲の形成
	<p>これから、また分らない</p>			

(考察)
本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

第五次感想文	第四次感想文	第三次感想文	第二次感想文
神様みたい ←			
・ まるで神様みたいだ。			ったら気がすむのか。
		ありがとう ←	
		一言だけ「ありがとう」と言っ てあげたかなあ。	
火なわじゅうを手にしなくなる ←	心につきささる ←	泣きそう ←	
・ 茂助じい(兵十)は、火なわじゅうを手にしなかつたと思う。	・ 何か心につきささつたよ うな感じ。 心の中に一生残つた。	・ 「お前だったのか」と言うとき、泣きそうだった。	
充足感 ←			意欲の喚起 ←
・ 感想文は短かつたけど、いい作品が書けた。			いことや意味が分かると思 う。

	「一口感想」	第一次感想文	
・ 私が印しように残っているのは、ご		・ なんとなくおぼえているのと一致していた。「ごんぎつね」って日本語が分かるねんなあ、と思つたり、「菜種がらのほしてあるのに、どうやって火をつけたりできるんやろ」と思った。	認識の深化・共感形成過程 ごんぎつね(人物像・最期の場面)
	・ このように勉強してみると、いろいろな疑問が出てきて、おもしろいと思う。読み進めていくと、またごんがやさしいということが分かってきた。(11/8)	・ 最後のところにも線を引いたところがあるので、聞いてほしかった。わりと、線を引くところが増えてきたし、手もあげるようになってきたことがうれしい。(11/7)	意欲の形成過程

(二) ごんぎつねの人物像と最期の場面に関し、共感形成が認められる児童
 ① 鴨谷真知子
 (傍線引用者)

第三次感想文	「一口感想」	第二次感想文
<p>私は、「ぐったり」というところから、ごんは最後の力を出してうなずいたと思う。たぶんごんは、くりやまつたけを持ってきたのは神様じゃあなくて、この自分だということを知っていて、この自分だということを知っていて、ほしいから、うなずいたと思う。でもごんはまもなく死ぬかも分からない。でも、最後に兵十に分かってもらってよかったなあ、と思っている。</p> <p>もし、死なずに生きれたら、今度はかげでこそそそしくなくても生きていけるし、兵十ともなかくよくできる。そうなら、ごんはひとりぼっちじゃあ</p>		<p>んがひとりぼっちであなの中に住んでいるとか、くりをどっさり拾ってきたこと。」「ひとりぼっちでさみしくないかなあ」とか、「いつからひとりぼっちで住んでいるのかなあ」ということが知りたくなったり、くりを持つてくるのはいいけど、小ぎつねだから「どっさり」と言っても五・六コぐらじゃあないかなあ、と思います。</p>
	<p>やっぱ私は、一人でやるより、グループで話し合う方がいいと思う。今日は少ししかできなくて残念だった。(11/13)</p>	

「一口感想」	第五次感想文	
	<p>この話が人間どうだったたら、そりゃあうなぎをとったり、勝手に人の家に入ったりののは悪いと思うけれど、うなぎをとられたり、家に入られたりしただけで殺すなんてしないと思う。ごんはきつねだったために殺されてしまったなんて、ごんがかわいそうだ。兵十がりよう師じゃあなくて、火なわじゅうを持っていなかったら、ごんを殺さずにいられたと思う。兵十も、もう少し様子を見てからにしてもおそくはなかったと思う。</p>	<p>なくなるから、死なずに生き返ってほしい。</p>
<p>以前には、くわしく読んではなかったけど、この頃はくわしく読むようになってきた。ごんの気持ちとかよく分かってきたし、疑問もたくさん出てきて、みんな話合ったりしたことなどもよかったです。(11/22)</p>		

(考察)
 本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は

次図のようになる。

	第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文	認識深化・共感形成 ごんぎつねの人物像・最期の場面
	← 共感形成 ←		やや白らけ	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 印しように残っているのは、(中略——引用者注)「ひとりぼっちでさみしくないかなあ」とか、「いつからひとりぼっちで住んでいるのかなあ」ということが知りたくなったり、(以下略——引用者注) 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ごんぎつねって、日本語が分かるねんなあ」と思ったり、「菜種がらのほしてあるのに、どうやって火をつけるんやろ」と思った。 	
		← 興味の喚起 ←	無記述	意欲形成
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人でやるよりグルー 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 線を引いたところを聞いてほしかった。手をあげるようになってきたことがうれしい。(11/7) ・ いろいろ疑問が出てきて、うれしい。読み進めて行くと、ごんがやさしいということが分かってきた。(11/8) 		

「一口感想」	第五次感想文	第三次感想文	「一口感想」
	← 事件に対する批評 ←	感動形成 ←	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人間どうしだったら、殺すなんてことはない。きつねだったために殺されるなんて、かわいそうだ。 ・ 兵十がりよう師ではなく、火なわじゆうを持ってなかったら殺されずにすんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ぐったり」というところから、ごんは最後の力を出してうなずいたと思う。死なずに生きられたら、今度は一人ぼっちじゃなくなるから、死なずに生き返ってほしい。 	
	← 充足感 ←		← 意欲の盛り上がり ←
<ul style="list-style-type: none"> ・ くわしく読むようになって、ごんの気持ちなどよく分かり、疑問もたくさん出てきた。みんなまで話し合ったりしたことがとてもよかった。(11/22) 			<ul style="list-style-type: none"> ・ プで話し合う方がいい。今日は、少ししかできなくて残念でした。(11/13)

(三) 「ごんぎつねの「ひとりぼっち」の境遇に対し認識の深化が顕著であり、かつ共感形成が認められる児童

① 大沢恵子

(傍線引用者)

第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文	認識の深化・共感形成過程	
			ひとりぼっち	ごんぎつね
<ul style="list-style-type: none"> ごんは、あなをほって住んでいた。雨の日は外で遊べないから、あなの中でしゃがんでいる。もう少し、あなを大きくすればいいの にと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 雨の間、ごんはあなの中でしゃがんでいて、遊べなかったのがとてもさびしかったと思う。(11/6) 	<ul style="list-style-type: none"> ごんぎつねは、わりといいきつねだ と思う。どうしてかという(中略 ——引用者注)、兵十のお母さんが死 んでしまったことを、ごんはほんとう に悪かったと思っていると思う。だか ら、毎日くりやまつたけを持って行っ てあげたと思います。そんなごんが、 私は好きです。 	意欲の形成過程	
			やさしさ	

第三次感想文		第二次感想文
<ul style="list-style-type: none"> 初めの方のごんは悪いところもあるけど、最後の方になって、ほん とうはとてもいいきつねだと思った。あの今までのいたずらは、ごん はひとりぼっちでさびしかったからだと私は思う。私は、この話がと ても好きです。 	<ul style="list-style-type: none"> ごんはいたずらばかりし ているけど、ほんとうはさ びしいと思う。友達もいな いから、いたずらをしてい ると思う。 	
		<ul style="list-style-type: none"> 毎日毎日、ごんは兵十の家へくりやまつた けを持って行ってあげた。五日の間、兵十は 全然気づかなかったのかなあ。とうとう六日 目に、ごんは兵十に見つかって殺されてしま った。 やっぱり、毎日毎日くりやまつたけを持っ て行っていたのは、うなぎのつぐないだけじ やなくて、ごんも兵十も同じひとりぼっちだ ったからだと思う。

「一口感想」	第五次感想文
	<p>・ くんは、とてもさびしかったんだと私は思う。でもくんのいたずらはふつうのいたずらよりもひどいはずだった。私は、ちょっとやりすぎだったと思う。村の人たちが、いっしょうけんめいに畑でいもを作っているのに(中略——引者注)そんなことをやっていたら、村の人たちが暮らせなくなってしまう。そんなことが、くんには分かっていないと思う。</p>
<p>・ 「くんぎつね」を勉強して、いろいろなことが分かった。たとえば、兵十の家や井戸はどんなであるとか(中略——引者注)四年生で習ったときは、こんなこと分らなかった。また、くんはどんなさつねか。とてもやさしいさつねだと分かった。ほんとうは</p>	

	第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文
<p>← 認識の深化 ←</p> <p>・ 「おれと同じひとりぼっちの兵十か」と言ったとき、くんは仲間ができたと思った。</p>	<p>・ あなたのなかにはしゃがんでいる。もう少し、あなたを大きくすればいいのに、と思う。</p> <p>・ さびしいから、いたずらをしてる。</p>	<p>・ 雨の日、とてもさびしかったと思う。</p>	<p>無記述</p>
<p>←</p> <p>・ 私は、この話がとても好き。</p>			<p>好き</p> <p>・ わりといいきつね。そんなくんが、私は好き。</p>

(考察) 本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

<p>みんなやさしいんだ と思った。勉強して よかったと思う。 (11/22)</p>

	ひとりぼっち	認識の深化・共感形成過程	
		ごん	やさしさ
ほんとうは	ごんはいつもいたずらばかりしているけど、	最後の場面	
		もう少し早くくりやまつたけを持ってきてい	るのがごんであることが分かる
意欲の形成過程			

② 木谷亮治

「一口感想」	第五次感想文	第三次感想文
	事件回避 ←	
	<ul style="list-style-type: none"> ごんはとてもさびしかったんだと思う。でも、ごんのいたずらはふつうのいたずらよりもひどいはずだった。 	<ul style="list-style-type: none"> 今までのいたずらは、ひとりぼっちでさびしかったからだ。 毎日毎日、くりやまつたけを持って行っているのは、ごんも兵十も同じひとりぼっちだったからだ。
充足感 ←		とても好き ←
<ul style="list-style-type: none"> 「ごんぎつね」を勉強して、いろいろなことが分かった。勉強してよかった。 		

第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文
<ul style="list-style-type: none"> ごんはいつもいたずらばかりしているけど、ほんとうは家族も友だちもいなかから、さびしくていたずらをしていと思う。家族や友だちがいたら、いたずらなんかしなかつたと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ごんは、ひとりぼっちで家族がいない。ごんは、せまいあなの中に住んでいる。(11/6) 	<ul style="list-style-type: none"> やさしいきつねだと、ぼくは思う。だって、うなぎをとってきて(以下略—引用者注)
		<ul style="list-style-type: none"> ていたら、火なわじゅうでうたれて死ぬことはなかつたと思う。

第五次感想文	第三次感想文
<p>・ どんが権現山にいればこんな事件は起こらなかったのに、なぜ危険な人間がいるところへ出て行くのかなあ。 権現山にいれば友達だってできると思う。ぼくがどんだったら権現山にいたと思う。どんは、</p>	
<p>・ 兵十があのと き、先に家の中を見ていたら、どんも死なずにすんだと思う。</p>	<p>・ くりやまつたけを毎日持って行っていることが兵十に分かりどんは死んでもうれしかったと思う。どんの一番の願いは、くりやまつたけを持って行っているのを兵十に知ってもらい、なかよくいっしょに暮らすことだった。</p>
<p>・ 「どんぎつね」は単なる話だけど、勉強しているときはほんとうにあったような感じがする。</p>	

「一口感想」	
	<p>何か権現山にいられない事情でもあるのかなあ。</p>
<p>・ 今まで「どんぎつね」を勉強して、四年生のときに分らなかったことがいろいろ分かった。(11/22)</p>	

(考察)
本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

感想文	「一口感想」	第一次感想文	
<p>← 認識の深化 ←</p> <p>・ 家族も友達もいないから、さびしくて、いたずらをしている。</p>	<p>・ どんはひとりぼっちで、家族がいない。せまいあなの中に住んでいる。(11/6)</p>	<p>無記述</p>	<p>「ひとりぼっち」に関する認識深化</p>
		<p>無記述</p>	<p>意欲形成</p>

第一次感想文		認識の深化・共感形成過程	
	ひとりぼっち	ごんぎつね	兵十
	初期の場面		意欲の形成過程
	<ul style="list-style-type: none"> 初めは悪いことをして、たけど、後になっていいことをしているのに、なんでごんは死ななきゃあ 		

③ 藤條珠江

(傍線引用者)

「一口感想」	第五次感想文	第二次
	<p>事件回避 ←</p> <ul style="list-style-type: none"> 権現山にいれば、こんな事件は起こらない。なぜ、危険な人間のいるところへ出て行くのか。 	
充足感 ←	感動形成 ←	
	<ul style="list-style-type: none"> 「ごんぎつね」は単なる話だけど、勉強しているときは、ほんとうにあったような感じがする。 四年生のときに分らなかったことが、いろいろ分かった。(11/22) 	

第二次感想文	「一口感想」	
	<p>ごんは、なんていたずらばっかしするのか、わからない。なんで、ごんはひとりぼっちなんだろう。お母さんやお父さんや、兄弟はいないのかなあ。(11/6)</p>	ならないのか、と思った。
<p>兵十もひとりぼっち。兵十はかわいそうと思う。びんぼうの上、兄弟もお父さんもない。お母さんは死んだ。兵十はどうして、こんなにも悲しい運命なのだろう。私が思うには、兵十</p>		
	<p>なんで「一口感想」とか作文を書かなあかんのかなあ。それやし、「ごんぎつね」は四年で習ったのに、なんでもう一回やらあかんのかなあ。(11/5)</p>	

第五次感想文	第二次感想文
<p>・ごんはひとりぼ つちで、いっしょ に遊ぶ子がいない から、いたずらを していることが分 かりました。 ごんは心の中 は、やさしい心と</p>	
<p>・この「ご んぎつね」 は、最後 の死ぬと ころを変 えてほし い。変え て、兵十</p>	
	<p>には兄弟はいな いと思う。お父 さんは病気で死 んだか、それと も行方不明かも しれない。 兵十は今まで どうやってごは んを食べていた んだらう。だっ て、第一章から 第三章まで読ん でも、働いてい るところは書か れていない。兵 十は、ひとりぼ つちでこれから 先どうやって生 きていくのだら う。</p>
<p>・私は、「ご んぎつね」を 勉強して、い ろいろなこと が分かっけ ました。ごん ぎつねと兵十 は、たぶん実</p>	

第五次感想文
<p>さびしさがあると 思う。(中略— 引用者注) この「ごんぎつ ね」という作品は 私たちの身の回り のことで似ている ところがある。ご んはひとりぼつち でさびしがってい る。人間の子ども だって、お父さん やお母さんが働き に出て、家で一人 です番をする子 がいる。それに、 そのように一人で す番する子の中 に、いたずらをす る子もいればしな い子もいる。その 他にも、お父さん はいても帰りが遅 くて、家族みんな でごはんをいっし よに食べられない 子どももいる。</p>
<p>といっし よに暮ら してほし い。</p>
<p>際に存在した と思います。 確証はないけ ど、少くとも この物語の中 で生きている と思います。</p>

(考察)

本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

第五次感想文	第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文	
身の回りの生活と比較 ←		認識の深化 ←	無記述	「ひとりぼっち」に関する認識深化
<ul style="list-style-type: none"> 「ごんぎつね」という作品は、私たちの身の回りのことで似ているところがある。お父さんやお母さんが働きに出て、一人です番している子がいる。家族みんなでごはんをいっしょに食べられない子どももいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 兵十もひとりぼっち。兵十はひとりぼっちで、これから先どうやって生きて行くのだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> なんで、ごんはひとりぼっちなんだろう。お母さんやお父さん、兄弟はいないのかなあ。(11/6) 		
感動形成・充足感 ←		抵抗感		意欲形成
<ul style="list-style-type: none"> 「ごんぎつね」を勉強して、いろいろなことが分かってきた。ごんぎつねと兵十は、実際に存在する。少くとも、この物語の中で生きている。 		<ul style="list-style-type: none"> なんで、「一口感想」とか作文を書かなあかんのか。「ごんぎつね」は四年で習ったのに、なんでもう一回やらなあかんのか。(11/5) 		

(四) ごんぎつねの最後の場面に関し、共感形成が認められる児童

① 徳山勝也

	「一口感想」	第一次感想文	
<ul style="list-style-type: none"> ごんは、覚悟の上でくりやまつたけ 	<ul style="list-style-type: none"> 考えたことはたくさんあったけど、ぜんぜん手上げなかった。作文を書くのは嫌いだ。(11/7) 今日は、久しぶりに発表した。みんなで考えたことを言った。班で、みんなの手を上げなあと決めたので上げたら、二回も当たってしまった。(11/9) 今日は、ごんのことから分らないことがたくさん分かった。今まで、なぜこそそしながらくりやまつたけを置いて行ったのがよく分かった。(11/14) 	<ul style="list-style-type: none"> ごんの最期がかわいそうだと思う。兵十に誤解されて殺されるから。 	認識の深化・共感形成過程 ごんぎつね(最期の場面) 意欲の形成過程

(傍線引用者)

<p>第四次感想文</p> <ul style="list-style-type: none"> ぼくは、この話は避けることができなかつたと思います。なぜかというところは、ごんはもともといはずら好きなんだか 	<p>第四次感想文</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ごんぎつね」に登場するごんと兵十は、どちらも気の毒だなあ、と思います。なぜかというところ、ごんは兵十となかよくなりたいたと思つたのに、その兵十に鉄ぼうでうたれるし、兵十はお母が死んで、ごんも死んだので一人ぼっちだからです。 	<p>「一口感想」</p>	<p>第三次感想文</p> <p>を持って行つたにちがいないと思う。これは命がけだからだ。ごんは、もともと「兵十のお母を殺したのはおいらだ。だから、くりやまつたけでつぐないができるとは思えない。やつぱりつぐないとして、兵十に殺された方がいい」と思つていたのかもしれない。ごんのような、かしこく、かわいいきつねはいないと思います。</p>
		<p>「一口感想」</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日は、たつた三行のところを考えたので、気づいたことを一つも書けなかつた。だけど、みんなは気づいてたことをいろいろ発表していた。みんな、よくあんなに気がつくなあ。 	

<p>第五次感想文</p> <p>ら、魚を逃したくなるのもあたり前だと思ふ。それに、兵十がどんな目的でうなぎを取つていたのか知らなかつたのだから、しかたのないことだ。</p> <p>兵十も悪い。何かをさがしに川上の方へ行くなら、そのときだいじなうなぎが入つてゐるびくを持って行けばよい。</p> <p>ごんも悪い。いつもいたずらばかりしてゐるから。この事件のように、ちよつとのいたずらが一人の命をうばつてしまうことになつたのだと思います。</p>

(考察)
 本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

<p>「一口感想」</p> <p>← (認識深化)</p> <p>第一次感想文</p> <p>平板な感想</p> <p>ごんぎつねの最期に対する共感形成</p> <p>・ ほんの最期がかわいそう。</p>	<p>第一次感想文</p> <p>平板な感想</p> <p>ごんぎつねの最期に対する共感形成</p> <p>・ ほんの最期がかわいそう。</p>
<p>← (意欲の形成)</p> <p>平凡な反応・消極的な読みの姿勢</p> <p>意欲形成</p> <p>・ 「ごんぎつね」ってこんな話だつたかなあ。</p> <p>・ 考えたことはたくさんあつたけど、ぜんぜん手を上げなかつた。(11/7)</p> <p>・ 久しぶりに発表した。班でみんなの手を上げなあと決めていたので、上げたら二</p>	<p>第一次感想文</p> <p>平凡な反応・消極的な読みの姿勢</p> <p>意欲形成</p> <p>・ 「ごんぎつね」ってこんな話だつたかなあ。</p> <p>・ 考えたことはたくさんあつたけど、ぜんぜん手を上げなかつた。(11/7)</p> <p>・ 久しぶりに発表した。班でみんなの手を上げなあと決めていたので、上げたら二</p>

第五次感想文	第四次感想文	「一口感想」	第三次感想文	「一口感想」
事件に対する批評 ←			感動形成 ←	
<ul style="list-style-type: none"> この話は、避けることができない。兵十も悪いし、ごんもちよつとのいたずらのために命をうばわれることになっちゃった。 	<ul style="list-style-type: none"> ごんと兵十は、どちらも気の毒だ。 		<ul style="list-style-type: none"> ごんのような、かしく、かわいいきつねはいないと思います。 	
		意欲の盛り上がり ←		
		<ul style="list-style-type: none"> 今日は、たった三行のところを考えたので、気づいたことを一つも書けなかった。だけど、みんなよくあんなに気がつくなあ。(11/16) 		<ul style="list-style-type: none"> 回も当たってしまった。(11/9) ごんのもので、わからないことがたくさん分かった。なぜ、こそそくりやまつたけをとどけていたのか、よく分かった。(11/14)

一三七 「ごんぎつね」の文学の授業(六年)(二) — 「感動」の形成過程に関する考察 — (北)

「一口感想」	第一次感想文
<ul style="list-style-type: none"> ごんは兵十が好きなのに、自分からきつねだからすぐくくやしいんだと思う。だから「神様なんかいなけりやいいのに」なんて、ひにくれたことを考えるんだと思う。ごんは、自分が兵十にくりやまつたけを持って行っているということを知ってほしいんだと、私は思う。(11/14) 	<p>病気 欠席</p>
	<p>認識の深化・共感形成過程</p> <p>人物像</p> <p>ごん ぎつね</p> <p>最期の心情、等</p> <p>意欲の形成過程</p>

(五) 「擬獣化」の視点からごんぎつねの最期の心情、作者の執筆モチー
フについて記述している児童
① 石戸早苗
(傍線引用者)

第五次感想文	第三次感想文
<p>私は、ごんが兵十にうたれたのは避けようのないことだと思ふ。どんなにごんが人間のような心を持っていても、きつねである限りはしかたがないんじゃないか、と私は思う。</p> <p>兵十はごんのことを、ただのきつねとしか思っていないかった</p>	<p>「目をつぶったまま、うなずいたときのごんは、あまり悲しくなかったんじゃないかと私は思う。(中略——引用者注)だから、どうせ生きていたって自分がきつねであるうちは気にかけてくれないだろう。それならばいっそ、他の人にうたれて死ぬよりも兵十にうたれて死ぬ方がましだ。でも、今度生まれてくるときは、人間に生まれたい。きつと、こんなことを思いながら、ごんは死んだんじゃないかと思う。(中略——引用者注)ごんの悲しい気持ちというのは、兵十にうたれて死ぬのが悲しいんじゃないかと、自分がきつねだったというのが悲しいんじゃないかなあ、と私は思う。</p>
<p>私は、動物と人間が出てくる本はたいいて好きだけどこの話はその中でもすごく好きで</p>	<p>私は、動物と人間が出てくる本はたいいて好きだけどこの話はその中でもすごく好きで</p>

第五次感想文
<p>だるうし、なにしろ仕事がりょう師だったのだから。でも、ごんは兵十にうたれてもあまり悲しくなかったんじゃないかと私は思う。ただ、「今度生まれてくるときは、人間に生まれたい」みたいなことだけ考えて、死んで行つたんじゃないか、と思う。</p> <p>私は、この話は新美南吉が結核でM子さんと幸せになれない自分と、きつねだから兵十と友達になれないごんとを重ねて書いたんだと思う。だから、極端に言えば、茂助という人が子どもを集めていろんな話をしてくれたとしても、南吉がそれをそのまま物語にしたということは考えられないと思います。きつと、南吉は茂助の話を参考にしないで、自分のあわれな気持ちをこの物語に表したんだと思います。</p>
<p>す。「ごんきつね」を勉強できて本当によかったです。</p>

(考察)
 本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

	第三次感想文	「一口感想」	第二次感想文	第一次感想文	認識深化・共感形成 最新的心情・作品執筆のモチーフ、等 病 気 欠 席 意欲形成
	← 〈擬獣化〉の視点 ←	← 求愛としての把握 ← (第4・5節の学習)	← (認識の深化)		
	・ この話は、新美南吉が結核で ・ 兵十にうたれて死ぬのは悲しくない。ただ、今度生まれてくるときは人間として生まれるたい。	・ ごんは兵十が好きなのに、自分がきつねだからすぐくくやしい。だから、「神様なんかいいけりゃいいのに」と、ひにくれたことを考える。(11/14)			
	・ 動物と人間が出て				

「一口感想」	第一次感想文	認識の深化・共感形成過程 兵 十 (ごんぎつね(いたずら))	意欲の形成過程 (傍線引用者)
	・ あのきつねは、悪者か、良い者か、いったいどちらだ。	・ きつねを殺すことではないと思う。	・ あれは(この物語は——引用者注)何回か聞いたことがある。
	・ ぜんぜん、おもしろくなかった。(11/6)		・ だんだん、おもしろくなってきた。スリルがあるから。(11/8)

(六) 兵十に対して一貫して非難している児童
① 清原弘基

第五次感想文
作者の「ごんぎつね」執筆のモチーフ
M子さんと幸せに出来ない自分と、きつねだから兵十と友達に出来ない自分とを重ねて書いた。
← 充足感 ←
くる話の中で、この話は特に好き。「ごんぎつね」を勉強できて、本当によかった。

第四次感想文	第三次感想文	第二次感想文
<p>• ごんのお母さんは どないしたんかなあ。 死んだんかなあ。そ れとも、ごんをすつ ぽかして、どこかで</p>		
<p>• 兵十も悪いところが多か った。ごんをうったりして 動物を殺すという悪い心を 持っている。ごんも、兵十 も、悪いところを直してい</p>	<p>• それにしても兵十は、無 残なことをしよった。かわ いそうだと思わんのか。ご んも悪いけど、兵十は人の 心をぶちこわすような人間 だ。</p> <p>• 兵十も、うってしまっ た後でごんがくりをくれたこ とを知ったから、あほや。 そんなにくりのことが不 思議やったら、いつも窓から のぞいとつたらいい。兵十 は、頭が働かない。</p>	<p>• 兵十と茂助は名前がちが うけど、同じ人間だと思 う。名前がちがうのは、自分の したことがばれたらあかん から、変えていると思う。 鉄ぼうを持っているとか、 手の大きさを、だいたい検 討がつく。</p>
<p>• これで、や つと勉強が終 わった。いろ いろなことが あった。</p>		

第五感想文	
<p>お父さんと暮らして んのかなあ。ごんは 捨てられた身だと思 う。一人ぼっちやか ら、みんなに裏切ら れたかもわからへん。 どうして、ごんが ワルになったかは、 たぶん親から見捨て られたからだと思 う。見捨てた親が悪い。 ごんはたぶん、小さ いときに見捨てられ たと思う。だから、 畑に入つて、いもを 食べたりしたと思う。 畑に火をつけるとい うことは、小さいと きから練習せなあか ん。ごんが悪くなっ たのは、みんな親の せいだ。</p>	<p>つしよに暮らせばよいもの を、それを兵十がぶちこわ してしまった。それが腹立 たしい。何も殺すことはな い、と何度も思った。 最後に、兵十に言いたい ことがある。いい心をふや そう！</p> <p>それにして も、とてもお もしろい物語 やったと思う。</p>

(考察)
本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は
次図のようになる。

次感想文	第三次感想文	第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文	
← (「ひとりぼっち」の境遇に対する認識の深化)				悪者か、良い者か	認識深化・共感形成
				<ul style="list-style-type: none"> ・ 悪者か、良い者か、いったいどちらだ。 	
← (兵十の非に関する認識の深化)				非難	兵十
<ul style="list-style-type: none"> ・ ごんをうった後で気がつくようではアホだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 無残なことをしよった。兵十は、人の心をぶちこわすような人間だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 兵十と茂助の名前がちがうのは、自分のしたことがばれないように変えている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ きつねを殺すことはない。 	
← 興味の喚起 ← 抵抗感					意欲形成
			<ul style="list-style-type: none"> ・ ぜんぜん、おもしろくなかった。(11/6) ・ だんだん、おもしろくなってきた。スリルがあるから。(11/8) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何回か、聞いたことがある。 	

「一口感想」	第一次感想文		
		認識の深化・共感形成過程 (ごんぎつね(最期の場面))	
		兵十	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私は、この話はまったくの作り話だと思っていた。だけど、権現山があったりするから、びつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私は、この話はかわいそうだから読んだりするのはいやだった。ごんぎつねがすごくかわいそうと思う。 	意欲の形成過程

(七) 「ごんぎつね」の学習に対して強い抵抗感を抱いていた児童
① 樺山さおり

(傍線引用者)

第五次感想文	第四
親が悪い ←	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ごんがワルになったのは、小さいときに親から見捨てられたから。みんな親のせい。 	
激しい非難 ←	
<ul style="list-style-type: none"> ・ いっしょに暮らせばよいものを、兵十がぶちこわした。何も殺すことはない、と何度も思った。 	兵十は頭が働かない。
充足感 ←	
<ul style="list-style-type: none"> ・ やっと勉強が終わった。いろいろなことがあった。それにしてもおもしろい物語だった。 	

	第二次感想文	「一口感想」
<p>・最後の「ごんが死ぬところは、</p>		
	<p>・ここまでの学習だったから、ごんは殺されないから別にいいけど、最後に殺されるからいやだ。 「ごんぎつね」を四年生で勉強した時は、わりなくわしくやったけど、資料などを使ってやらなかった。だから、今やっている「ごんぎつね」は資料が多く、いろいろ分かっておもしろい。</p>	<p>りした。(11/5) 今日は、「前書き」のところ、すぐ分かってきた。一行にいろいろ意味があるんだなあ、と思った。とても、よく分かった。(11/6) 最後に発表したいことがあったのに、言えなかった。班学習の方がすぐ理解できてやりやすいし、いいと思う。班の人で相談できるから。(11/7)</p>

	「一口感想」	第三次感想文
	<p>・ごんが死ぬとき、私は四年生のときには、ごんはぜったい助かると思っていた。だけど、今は死ぬんだなあと思った。ごんが火なわじゅうでうたれてから兵十は気がつくから、かわいそうだけど、ごんは死んでしまうと思う。(11/6)</p>	<p>かわいそう。だけど、ごんは最後に自分のことに気がついて分かってくれたので、うれしくて何となく笑って死んでいる、と思う。</p>
<p>・私は、「ごんぎつね」の話は茂助じい</p>		

第四次感想文

<p>が若いときに体験したことだと思う。ごんをうって、ひどく後悔して、りょう師をやめたと思う。茂助じいは、最後にごんを殺してから、やっとごんの気持ちを理解できた自分を情けなく感じていたと思う。(中略——引用者注) それからごんに謝るような気持ちで、子どもたちに話したと思う。私も、もし兵十だったらごんを殺してしまっているかもしれない。何も分らないのに、「悪い」と決めつけてしまうことはとてもよくないと思った。</p>	<p>この事件が起きたのは、兵十がごんの気持ちを理解してあげられなかったからだ、と思う。(中略)</p>

第五次感想文

<p>「一口感想」</p>	
<p>——引用者注)兵十は、おじいさんになっても、このことを後悔したと思う。 こんなおじいさんは、やっぱり若いときにあやまちがあつて、こんな人になれると思う。この話はすつと読むと単なる物語だけど、ちゃんとかわしくやったらとても意味の深い話だと思った。</p>	
	<p>ただ単に、すつと読んでいただけだったら、この話はいかかわいそうだけど、ちゃんと学習したら、それほどかわいそうとは思わなかった。(11/22)</p>

(考察)

本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は次図のようになる。

第四次感想文	第三次感想文	第二次感想文	「一口感想」	第一次感想文	
私も、ごんを殺しているかも	← こんは何となく笑っている ←			← こんがかわいそう ←	認識深化・共感形成 ごんぎつね(最期の場面)
<ul style="list-style-type: none"> 私も兵十だったら、ごんを殺しているかもわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごんは、何となく笑って死んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ここまでの学習だから、殺されないからいい。 		<ul style="list-style-type: none"> この話はかわいそうだから、読んだりするのはいや。 	
			← 興味の喚起 ←	← 抵抗 ←	意欲形成
		<ul style="list-style-type: none"> 今勉強している「ごんぎつね」は、資料が多く、いろいろ分かっておもしろい。 	<ul style="list-style-type: none"> 全くの作り話ではなさそう。(11/5) 「前書き」の一行一行に深い意味がある。(11/6) 発表したいことがあったのに、言えなかった。班学習では、すぐに理解できる。(11/7) 	<ul style="list-style-type: none"> この話はかわいそうだから、読んだりするのはいや。 	

第一次感想文		
<ul style="list-style-type: none"> この話でいいところは(中略——引用者注)おわびにくりやまっただけを兵十の家にとどけたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ごんぎつね(やさしさ) 	兵十
<ul style="list-style-type: none"> ごんは、よくいわしをぬすんだなあ。発表しようと思っただけと言えなかったのは、「ご 	<ul style="list-style-type: none"> 四年生のときに、一回学習しているからあまりおもしろくなかった。どうして、今ごろから「ごんぎつね」の勉強をするのかなあ。この話はいい話だけど、二回勉強してもおもしろくない。 	意欲の形成過程

② 小松知広

「一口感想」	第五次感想文	
← それほど、かわいそうではない ←	← 意味が深い ←	
<ul style="list-style-type: none"> ちゃんと学習したら、それほどかわいそうとは思わなかった。(11/22) 	<ul style="list-style-type: none"> くわしく勉強すると意味が深い。 	
	← 充足感 ←	
<ul style="list-style-type: none"> ちゃんと学習したら、それほどかわいそうとは思わなかった。(11/22) 	<ul style="list-style-type: none"> この話は、ずっと読むと単なる物語だけど、くわしく勉強すると意味が深い。 	

(傍線引用者)

「一口感想」	第二次感想文	「一口感想」
	<p>・ ごんは、うなぎをとって悪かったと思つて、兵十の家におわびに山でとつたくりをどつさり、まつたけも二・三本持つて行った。なかなか責任を感じないいきつねじゃないか。</p>	
<p>・ ごんは、自分がいいことをしているのに対してお礼を言つてもらわないと気がすまないようだ。神様は何もしていないのに、どうしてお礼だけは言ってもらえるんや、と思つているんじゃないか。発表できなかつたところは(以下略 — 引用者注)(11/14)</p>		<p>んは山でどつさりくりを拾つて」なんて書いてあるけど、何ごういかなあとか、「兵十はいわし屋にぶんなぐられた」というのが、どうしてごんに分かるかです。(11/9)</p>

第四次感想文	第三次感想文
	<p>・ ごんは一人暮らしだから、話し相手がほしくて、うなぎのつぐないにくりやまつたけを毎日とどけていることを、兵十に気づいてほしかつたんなあ。ごんは、人間なみの考えを持つているほんとうはいいいきつねなんだ。</p>
<p>・ 兵十がごんのお気持ちを理解できなくても、しかたがないと思つています。ぼくの家に猫がいます。この猫は、食事のしたくをして、いるちよつどのすきに、おかずをかっぱらつたりします。そん</p>	

第五次感想文	第四次感想文
	<p>な猫の気持ちさ え、ぼくには分 かりません。時 によつてちがつ たことをしたり するからです。 だから、兵十だ つてじままなき つねと思つてう つてしまつたん だろう、と思い ます。</p>
<p>「ごんぎつね」を勉強する ようになった時、「どうして おれらの組だけ四年生のとき 一回した勉強を、二回もせに ゃああかんねん」と思つてい た。でも、何回かやっている うちに、「動物も生き物、人 間と同じ悪いところもあれば いいところもある」という気 持ちは強まってきた。でも、 心の中でそう思つていても、 長所はあまり分らない。犬 や猫など飼っている人でも、 自分の家で飼っている動物の 長所はあまり理解できないと 思う。</p>	

「一口感想」	第一次感想文	
← (認識の深化)	<p>この話の いいところ</p> <p>・ この話でいいところは、お わびにくりやまつたけを兵十 の家へとどけたこと。</p>	認識深化・共感形成 ごんぎつね(やさしさ)
←	<p>抵抗</p> <p>・ 四年生のとき学習 しているから、二回 勉強してもおもしろ くない。</p> <p>・ 発表しようと思つ たけど、言えなかつ たことは：(11/9)</p>	意欲形成

(考察)
本表を基に考察を加える。認識深化・共感形成・意欲形成の変容は
次図のようになる。

「一口感想」
<p>・ 今まで、勉強してきた中で 感じたことは、動物にもやさ しい心があることを「ごんぎ つね」で教えられたという気 がします。初めは、いややな あ、と思つて勉強していて、 授業が終わるたびにやつと終 わつたなあ、といやいやだつ たけど、何回かやっている間 におもしろくなつてきた。い い勉強ができたと思います。 (11/22)</p>

「一口感想」	第五次感想文	第四次感想文	第三次感想文	「一口感想」	第二次感想文
	自分の周囲の動物 ←			なかなか、いいきつね ほんとは、いいきつね ←	
	<ul style="list-style-type: none"> 何回か勉強しているうちに「動物も生き物、人間と同じ悪いところもあれば、いいところもある」という気持ちが強まってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ぼくの家で飼っている猫の気持ちを理解できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごんは、人間なみの考えを持っている、ほんとはいいきつねなんだ。 		<ul style="list-style-type: none"> なかなか、責任感を感じるいいきつねじゃないか。
充足感 ←					意欲の向上 ←
	<ul style="list-style-type: none"> はじめは、いやいやだったけど、何回かやっている間にもむしろなってきた。いい勉強ができた。(11/22) 				<ul style="list-style-type: none"> 発表できなかったところは…(11/14)

「一口感想」	第五次感想文	第三次感想文	第二次感想文	第一次感想文	
	充足感 ←		興味の喚起 ←	消極的	意欲の形成過程
	作者の言いたいことが分かった (とても、おもしろかった)		おもしろく なってきた	(あまり、おもしろくない)	
	<ul style="list-style-type: none"> 四年生のときは、作者がこの作品で言いたいことはあまりよく理解できなかった。六年生になって、深く学習して作者の言いたいことがよく分かった。(11/22) 	<ul style="list-style-type: none"> 私は、ごんぎつねはやっぱり世の中にいたと思います。なんとなくだけれど、やっぱりこの話は現実を起こった話で、茂助じいが体験したことだと思えます。そうなる、どうしても茂助じい兵十と重なってきます。この物語は、とてもおもしろかったです。 	<ul style="list-style-type: none"> この話は、とてもおもしろかったです。 	<ul style="list-style-type: none"> だんだん、おもしろくなってきたので、もっと勉強したいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 一度、学習しているので、話の内容は大体理解しているから、聞いてもあまりおもしろくなかった。

③ 笠原奈緒子

(傍線引用者)

(考察)

この児童の場合は、認識深化・共感形成に関しては変容過程を辿ることができないので、意欲形成に限定した考察を本表中で加えている。

本研究は、「ごんぎつね」を教材として六年生の教室で実施した筆者自身の授業を基に感動形成について考察を加えたものである。

(平成元年 十月 五 日受理)

(平成元年十二月二十七日発行)